

京都大学	博士(文学)	氏名	福嶋 亮 大
論文題目	チャイニーズ・イノセンス —— 1910-1930年代中国における文芸的公共圏の可能性と 主体性の諸様式		
(論文内容の要旨) 本論の目的は、1917年の文学革命以来、中国文学の近代化をリードしてきた胡適の言論活動を分析するとともに(第一部)、彼の盲点となっていた部分を他の作家がいかに浮き彫りにしていたかを探る(第二部)という、大きく二つの問いを解き明かすことにある。 まず第一部では、胡適の文学革命はいかなる論理に基づいていたかを探る。一般的に、文学革命は口語化の運動あるいは言文一致運動と同一視されることが多い。しかし、胡適の文章を仔細に読めば、その見方には欠陥があることが分かる。というのも、彼は「言」と「文」が一致できるとはまったく考えておらず、「国語」たり得る白話は生の口語ではなく、むしろ流通範囲の広い書き言葉だと見なしていたからである。彼は自発的な進化の上で、文芸的公共圏を構築しようとした。人為的な介入は、あくまでその自然の秩序を引き立たせるときにのみ正当化されるのであった。彼は一切の暴力的な「革命」を拒み、進化と革命を一体化させたのである(第一章)。 と同時に、胡適は主体性の様式についても、独自の見解を持っていた。彼は自伝あるいは伝記を重要視したが、いささか特徴的なことに、そこには日記や箇記などの日常に即したメディアの利用が伴われていた。彼の信念は「社会的不朽」という、いわば微細なものどうしのネットワークに置かれていた。アメリカ留学中に親しんだエマソンやブラウニング譲りの楽観主義を支える、この社会的ネットワークは、たとえば魯迅に典型的に見られる深刻な「中国へのオブセッション」(夏志清)を緩和するのに役立ったと言えるだろう。特に、胡適と魯迅についてはそのイプセン受容の差異からも、両者の文学観の相違を明らかにすることができる。たとえば、日本に留学した魯迅の描くイプセンは、闘争的な男性像によって規定されていたが、アメリカに留学した胡適はむしろ女性の力を中心化していた。もっとも、この両者がともに排除した家庭メロドラマに近いものは、1930年代の曹禺の演劇によって回帰することになる(第二章および第四章)。 さらに、胡適は、文学と公共性のあいだの繋がりも示している。彼は国語の条件を「最大多数」の人間を招き入れられることに置いていた、これは先行世代の嚴復が人間に対して悲観的な見解を持っており、そしてまた民衆の教育ではなくエリートの教育こそが最重要だと見なしていたことと比べると、一種の新しい態度であった。師であるデューイに倣って、教育の可能性を固く信じていた彼は、白話の学習環境を整備する『白話文学史』の執筆に着手する。もっとも、その際に、白話小説に内在する暴			

力性や性的要素については、彼は巧妙に遠ざけていた。彼はあくまで、質朴で平明なリアリズムに白話文学の可能性を見ていたのであり、なよなよしたフェミニティは評価の埒外にあった。この点で、彼はすべての白話小説を肯定したのではなく、あくまで一定の選択を加えていたと考えたほうがよい（第三章）。

このように、胡適はいくつもの操作を文学環境に加えることによって「中国へのオブセッション」に陥らずに済んでいた。この、一見して汚辱に満ちているかに見える中国社会の内部から、美的なものや健康的なものを発見しようとする探究的な精神構造を「チャイニーズ・イノセンス」という語で呼ぶ。胡適はまさに、チャイニーズ・イノセンスの具現者であった。

ただし、そのプログラムは決して彼だけに限定されていたわけではない。第二部で検討するように、チャイニーズ・イノセンスの系譜は、彼以外の作家にも見出すことができる。たとえば、周作人はイノセントな文学を中国ではなく日本に見出した。彼は一面では王韜や永井荷風のエロティシズムを排除しつつも、「生活の芸術化」という企てそのものは堅持しており、そのための手がかりを日本の落語や江戸期の文学などに求めていた。さらに、彼は生活を美化するための手段として書物を非常に重んじていた。このことは彼独特の文学観とも関わっている。彼はハリスンやフレイザーらいわゆる「ケンブリッジ・リチュアリスト」から大きな影響を受けていた。彼は、個人の秘せられた内面を告白することよりも、情緒を解放してやることを遥かに重視していた。ネーション単位で文学を見るのではなく、生活を芸術化してくれる小さな素材を国境を超えて探し求めること、そうした動機が周作人の活動を規定していた（第五章）。

むろん、魯迅もまた、単純に内面的鬱屈を書いただけの作家では決してなかった。彼の「阿Q正伝」や『故事新編』は、中国の歴史記述を換骨奪胎し、一種のカーニヴァル的な接触関係をもたらしたことにきわめて重要な意味が認められる。たとえば、阿Qの卑俗な「歌」は、歴代の史書が登場人物の歌う詩に自伝的機能を託してきたことを、ある意味ではパロディ化するものだろう。本来ならば人生の絶頂において歌われるはずの歌が、阿Qにおいては、実にくだらない虚栄心とともに歌われる。他方、魯迅と同じく歴史的人物を貶める歴史小説を書いた施蟄存は、すべての人間の根底に「欲望」が備わっていることを重視する。施蟄存にとっては、欲望に貫通されていることが、ひとびとの世界体験を基礎づける条件であった。

胡適がフラットな社会的平面を考えていたとすると、上海を舞台にした茅盾の『子夜』は遥かに起伏に富んだ社会を素描している。実業家の主人公、恋愛する詩人と少女、そして革命を扇動する理論家……しかし、『子夜』を彩る彼らの言葉は行き場を失って、磨耗している。代わりに、『子夜』を侵食するのが、自然現象さながらに荒々しい神話的存在としての「群衆」である。茅盾は同時代文学の抽出している「意識形態」が、現状の世界の変化に即応していないと考えていた。『子夜』を魅力的に見せて

いるのは、まさに古い意識形態を破壊し、新しい群衆の神話に置き換える、そのダイナミズムにある（第七章）。

もっとも、上海では同時期に群衆の暴力性とは真逆のレジャー文学も勃興していた。中国では長らく、旅に象徴的な意味合いを授けてきたが、1920年代に創刊された『旅行雑誌』は旅からそうした象徴的な重荷を取り去り、完全に産業化されたレジャーとして扱っている。程小青や張恨水ら、この雑誌に寄稿した大衆作家たちは、思わぬ対象との出会いに由来する主観的反応の記録を文学として記述した。都市部で禁欲的に働く「勤勉の主体」とちょうど対になるようにして、主観的感覚を心ゆくまで蒐集する「ツーリストとしての主体」が勃興したこと、本論ではこの二つのタイプの主体性を「経済人」の二つの相貌として素描する（第八章）。

胡適は、変化（＝進化の可能性）に富んだ民主的な社会ネットワークを、人間と世界を媒介するものとして認めた。その一方で、胡適ふうの無色透明の温和な媒介物＝文体を剰余する、カーニヴァルの・儀式的・レジャー的な文学があり得る。本論では全体として、胡適の「社会」概念と、そこから剰余するものを照らし合わせることによって、中国近代文学の像を描き直すことを心がける。最終的には、今日のイノセントな消費社会において織りなされている「第二の文学革命」とでも呼ぶべき新しい動向に歴史的な位置づけを与えるところまで、本論では議論を進めてみたいと思う。それによって、中国近代文学を規定する自虐的な性格（中国へのオブセッション）とは別の性格を抽出することができれば、本論の企ては成功したことになるだろう。

(論文審査の結果の要旨)

胡適 (1891-1962) は、中国近代文化史において最も重要な存在のひとりである。近代中国の文章語の主流を古典的な文語体から口語体へと転換させた「文学革命」の端緒をコロンビア大学留学中に拓いたのに始まり、中国現代詩の創始者、近代中国における思想史・文学史・宗教史研究の建設者、日中戦争期の中華民国駐アメリカ大使、中国の国家体制を批判しつづけた言論人など、胡適の経歴はきわめて多彩であり、著作も日記・手稿・書簡を含む膨大な量が残されている。19世紀末から第一次世界大戦期にかけて、欧米が中国にどのような文化的インパクトを与えたかを考察するにあたり、胡適は最優先でとりあげられねばならない。しかし、1950年代からの中国では、胡適が海外でおこなう激しい共産党批判の言論活動ゆえに、かれの存在は、近代文学史の記述において、否定もしくは抹消されていた。中国の学界がはっきりと態度を変え、胡適を再評価するようになったのは、1980年代末期からである。

本論は、この大きな対象に取り組み、胡適の多くの著作に「チャイニーズ・イノセンス」―近代の進歩から取り残されて汚辱に満ちているかに見える中国社会の内部から美的・健康的な要素を取り出そうとする積極的・楽観的な探究精神―が一貫して流れることを説き明かそうとする。全体は二部構成をとる。第一部は「国語」、自己、教育、演劇などに関する胡適の思考をあつかう。第二部は、胡適の文学論から完全に欠落している問題を取りあげ、それらが周作人・魯迅・施蛰存・茅盾らの手でどう扱われたかを論じる。この第二部の作家たちの多くは中国近代文学史においてつとに正典化されてきたが、胡適を軸に記述しなおせば、新しい位置づけが可能になるというのが本論の趣旨である。

論者がまず強調する胡適の特徴は、文化の変革にあたり、急進性をできる限り消し去ろうとしたという点である。ゆえに、書きことばの近代化にあたっても、胡適は伝統的口語文の自発的でゆるやかな「進化」をのぞみ、伝統的書きことばという過去の文化的遺産を無視することができなかった。古典語を1910年代に激しく批判していた胡適が、1920年代以降は「国故整理 (伝統的テキスト等の近代的把握)」の唱道者へと姿を変えたことも、その例として説明される。さらに、胡適が伝記・自伝の著述に熱意を持ったことは、さまざまな人生の描写を通じて社会的結合を高め、調和ある新生活を建設しようという意図を帯びていたと説かれる。

論者によれば、胡適にとって、文学は中国における最大多数の人間のものでなくてはならず、社会的共同作業に資する知識を広める使命を有していた。また、文学史は過去の中国に存在した社会的ネットワークを読み取ろうとするものだった。したがって、胡適は、中国の古典小説にみられるリアリズム、西洋文学にあらわれる市民社会の公共的人格などを選びとって光をあて、そうした作品がもともと含んでいる性的要素や暴力性、恋愛やメロドラマ的要素を注意深く取り除いてしまう。論者のこの議論から浮かび上がってくるのが、1949年の中華人民共和国成立以降に構築されてきた政

権公認の「健全」な文学史像の骨格自体、まさに胡適的議論の正統的継承者にほかならないことである。

ただし、1920年代の文芸的公共圏の周辺には、さまざまなかたちで、胡適の理念では覆いきれないものが生存を続けていた。事例として論者によりとりあげられるのは、無数の書物への耽溺に自己を拡散させる周作人の随想、中国の歴史における偉大さや完全性を意図的に避けようとした魯迅・施蛰存の「歴史」小説、ネットワークを欠き乱立する群衆を描く茅盾の小説、文化的変動の結果あらわれたレジャー文学や旅行雑誌などである。胡適によって建設された中国語の散文文体が、きわめて平易明快であり、いかがわしい夾雑物を慎重に除去していたのに対し、周作人らの文章はそこから逸脱し、良識が必ずしも通用しない世界に読者を導く。世紀転換期の欧米や日本から中国へともたらされた外国文学が、中国文学の伝統にいかなる刺激を与えたかを考えるための実例として読むことのできる論述である。

以上のような考察を前提に、論者は21世紀中国の消費社会における新世代を文化史にどう位置づけるべきかという問題に踏み込む。全くかけはなれて見えるふたつの時代について、論者は、1910年代商業主義の自由を肯定した胡適による文学革命、インターネットを背景とする21世紀中国文学が迎えている「第二の文学革命」の類似性を指摘する。中国文学は、もはや政治・文化的権威によって地位を保証されておらず、ネットワーク上の多くの読者の支持によって力を獲得しているという。論者は、かつて1910年代に胡適が構想したような中国語の自発的進化が、現在まさに生じていることを否定しない。さらに、社会の統合と繁栄の種子を絶えず求め続けた胡適の理念を実現し、中国が暴力を介さない社会的ネットワークを進化させていく可能性にも期待を寄せる。

本論は、1910年代から1930年代までを主たる対象としながらも、実質上、21世紀の中国で現在進行しつつある「第二の文学革命」までを射程におさめ、近現代中国文学の全体像を描き出そうと志したものであり、扱う範囲はきわめて広い。ただ、いま進行中の事態にもとづく仮説というべき箇所もときおりみられ、さらに一步をすすめた緻密な証明を求めたい。また、1910-30年代中国文学にみられるさまざまな言説が、19世紀欧州における文学言語の口語化、それにより引き起こされた文学観の衝突と変容をどう継承したのか、探究の深まりに期待したい面もある。

だが、中国近現代文学とは何であるかを問いかけようとする強い意欲に支えられた諸作品の位置づけの提示、大小の卓抜な指摘、論述の力強さは、不足を補って余りあるだろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年2月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。